

# 子どもの生きがいついて — H の生活から —



木原 溥子

息子のHは、この三月に四歳の誕生日を迎えた。この子は電車が大好きで、毎日、電車のこと話が話題にならない日は全くない。彼は二歳ごろから電車に興味を持ちはじめ、四歳になった今でも、一貫して変わらない。そして成長につれて、それを中心にした遊びの幅をどんどんひろげていく。

## 毎朝電車を見る

二歳のころのHは、昼間、週の大半を他家に預けられていた。毎朝、母の出勤の車に乗せられて、その家へ行くのが日課であった。途中、自動車道路と線路が並行して走る場所があり、ここを車で通るとき、たいていは走る電車を

見ることが出来る。たまたま電車が見えないとすこぶる不満そうなので、そんな日には、どこかで車をとめて電車が通るのを待つことにした。こうして電車を見ることができた朝は、たいへん満足しているようすで、安定感もあり、「おかあさん行っていらっしやい」と手をふって別れる。ところが、母の始業時刻がせまっていて電車を見ることができなかつた日には、きまってごきげんが悪く、出勤の母と離れるのが困難であった。

小さな子どもの一日が、朝の電車を見ることから始まる。電車を見ることは、当時の彼にとって一日における里程碑であり、また活動の糸口になっていたと言えるのではなからうか。そしてこのような毎朝の行事は、子どもに喜

びと、意欲と連続感などを与えてくれたもの、すなわち生きがいであったのだろうか。

### 電車に乗りたい

Hが通う幼稚園の裏側は線路に沿っていて、塀ごしに電車を見ることが出来る。三年保育に入るために、彼は二歳十ヵ月で入園テストを受けた。子どもは室内に入り、親たちは廊下で待っているのだが、親子が互によくみえるように境の戸は開放してあった。テスト中、Hは電車の通る音が聞こえるたびに、廊下にいる母に向かって、

「おかあさん、南武線！ 南武線に乗りたくないなあ！ 乗りたくないなあ」

と大きな声で言う。一方ではのびのびと気楽に、しかし一方ではなるべくじょうずに答えてほしいと願っている親の気持ちなどには全くおかないし、よくぞ一台も聞きのがさずに、と感心するほど電車通過のたびに言うのである。入園テストは、親たちにとっては大きな事件であるが、この年齢の子どもにとっては問題にならない小事なのだといつくづく感じさせられた。

それよりも、まずは 電車！ 電車の方が彼にとって

は、よほど重大事なのであった。

さて、その後幼稚園に通うようになって、南武線も毎日見ることができるようになった。「おかあさん『あの電車に乗せてあげますよ』って言うってね」とか、祖父に「おじいちゃん、本当に川崎行に乗せて下さるの？」とか、電車に乗りしたいという話題は多い。

### 電車「い」

幼稚園が春休みになると、朝からいすを並べて電車ごっこである。

「おかあさん、メグロにむかって走る電車は何線？」「メカマ線よ」「それじゃ、これはメカマ線ね。おねえちゃん、これメカマ線にしてね。ゴトンゴトン、メグロでございませう」「あ、定期を持ってくるから」

食堂車や寝台車など、遊びは近所の子どもも交えて展開されている。そして時折、

「サガミオオノは何線？」「電車はどうして線路の上を走るの？」「新幹線はどうして速いの？」「新幹線は大阪にとまる？ どうして？」などと質問がとびだす。

ブランコは電車ごっこの格好の遊び道具である。ガタン

ゴトン（しだいに声の調子をあげながら）ガタンゴトン、ガタンゴトン、次はアオバダイでございませう」「ガタンゴトンガタンゴトン、次はシブヤ、終点でございませう」

手をのびし、つり皮につかまるまねをして、身体を少しばかりゆらしては、電車に乗っているような格好をする。

来客があれば、「電車ごっこしよう」とひきずりこむ。

このようなときの表情は真剣で、乗客に、あるいは車掌になりきっているし、遊びもこの年齢の子どもとしては長時間続く。

また、こんなこともあった。久しぶりにピアノを弾く母に、「ママ、そのお歌でなくて電車の歌を弾いて。ここよ」と、歌唱の本のページをひらいて持ってきた。その曲を弾いてやると、今度は大急ぎで電車の玩具を持ってきて、曲に合わせて走らせたり、目的地について、遊園地で遊ぶことになったり、疲れておひるねになったり等々……あれこれにみたててゆたかに遊んだものだった。

またある日、父親と連れだつて電車に乗った。定期券で改札を通つたところ、

「どうして切符を買わないの？」。そこで、「見せる切符」

（定期券のこと）というものがあることを知った。

帰宅後、紙やホチキスなどを持ち出してきて、定期を作ってもらいに来た。父親に一つ、もう一つ姉に作ってもらつて、都合、二つできた。電車ごっここのときの遊び道具が、これでまた一つふえたことになった。

使いふるしの切符と同様、これは彼にとっては大切な「宝物」である。

### 電車のえほん

Hはまだ本に親しむという年齢ではない。しかし、電車が出てくる絵本となると目が輝くのである。

本屋の店先ではさつそく電車の絵本を手にして離さないし、家では、姉の絵本の中に電車の絵を見つけたら、自分の棚に並べたがって一騒動である。どこへ出かけるにも、「ママ、これ持って行っていい？」とたずねる本には必ず電車がでていゝ、という具合である。

最近、電車図鑑類（たとえば講談社版『でんしゃぎしやずかん』、借成社版『幼児のずかん』第二集『でんしゃぎしや』など）を楽しんでいる。そして二歳年上の姉との話題も、

「ママはロマンスカーに乗つたことがあるよ」「海の中を

通る電車もあるんだよ」「新幹線は、もうじき、こんな形  
のなるんだよ、どことが変わっているかなあ」「トンネル  
は地下鉄に乗っているみたいだねえ」

などと、知識も子どもながらに豊富である。

姉のMが笑う、「Hは毎日、電車のおはなしばかりねえ、  
人にも教えてあげたり自分も聞いたりして、おもしろい  
わ」と。

子どもが自身で楽しみ、よろこんでする事柄は、おのず  
から子ども自身にとっての話題を生みだし、発展性をも  
つ。このようなものが子どもの生きがいと言えらるのだろう  
し、また、生きがいとはこういう性質を含んでいるように  
思われる。

### 電車に乗る

この大好きな電車に乗ると、彼はたいへんお行儀がよい  
のである。座席にきちんとすわってジーンツとしてゐること  
もあるし、近ごろは、運転手のすぐうしろに立ってこれま  
たジーンツとみていることもある。耳も目もよく働いている  
らしい。だから、日常のちよつとした音にも、「電車が走  
り出すときの音のようだ」などと言ったりする。

こんなHのために、新幹線に乗って関西へ出かけること  
になった。Hがよろこんだのは言うまでもない。新幹線の  
出ている本をひろげては、「○日にはこれに乗るの？」と  
期待に胸をはずませている。また、今までできなかったこ  
とを、「ほく、できるよ」と胸をはってやってみせる、と  
いうようなことまであった。いよいよ本当に切符を求めた  
ことを知ったとき、Hの目は一段と輝き、動作もいっそう  
うきうきと軽やかになり、食事も得意になって残さず食べ  
た。おかしなくらいお利口さんになったのである。

うれしくはずんだ気持ちは、子どもを一步成長させて、  
日常のいくつかのさ細な問題を簡単に克服して、次の新し  
い世界に入らせるようにみえる。子どもにこのはずみをつ  
けてやること、つまり生きがいを与えることが、子どもの  
成長にとって必須なものではなからうか。生きがいの内容  
なり与え方が重要なことはもちろん言うまでもないが。

### 文字への興味と電車

三歳半ごろのことである。幼稚園から帰ったある日、自  
分で紙と鉛筆を持ってきた。

「はじめ(Hの名)もおねえちゃんみたいに字を書きた

い」と言う。そこで母は、Hの手を動かしながら、「それなら、はじめって書きましようか」と言ってみた。ところがHの手は一向に動こうとはしないのである。しばらくして、「ながつ、だつて書こう」「おおい、まちって書きたい」と言うのである。もちろんこれらは自分の知っている田園都市線の駅名ばかり。この子は自分の名前よりも、駅の名前を自分で書こうとしてきたのであった。なにも氏名から習うことはないのだ。Hの手をとって、一緒に駅名を書き並べながら、もう少しで子どもの生きがいを見失ひ、親の生きがいをおしつけるところだったせつかちな自分の態度に、われながら苦笑したものだ。

X X X

子どもにとって生きがいとはどんなことだろうか。このテーマのために、電車好きのHのことをながたと書いてしまった。

子どもの一日の生活は、たくさんの遊びで満たされている。そして夢中になって遊んでいるときには、どの遊び、どの行動も彼らによるこびをもたらし、生きがいにつながっていると思う。この子どものように、幼いある時期に、

かなり長期にわたって興味をもちつづけ、遊びを發展させているものもあるし、短期間でも大きな影響を与えるものもあるであろう。

誰からもさし図されないで、子どもの内から出てくる遊び——これこそ「自発活動」とよばれるものではなからうか。子どもが本当に生きがいをもてるのは、結局「自発活動」の時なのであると思う。ここには、子どもが生き生きとよろこび、かつ楽しみつつ成長していく姿がある。このような遊びから、子どもはさらに充実安定した生活の輪をひろげていくことであろう。

こんな子どもの姿は親にもよろこびをあたえ、生きがいをもみ出していることは事実である。

(洗足学園短期大学)

